第七九回福島県文学賞俳句部門正賞

雲平線（うんぴょうせん）

宗像　眞知子

餅花に揺るる小さき三春駒

容赦なく老木哭かす春の雪

三月一一日海へ行く日よ夫居らば

たんぽぽや針は津波の刻のまま

十五年復興とは何亀の鳴く

かぎろへる建屋原発再稼働

ふくしまの子供にならず卒業す

お守りはもんぺの端布杏子の忌

師と掛けし岩は変はらず滝桜

花万朶雪折れの傷包みをり

樹霊パワー全身に享く滝桜

葉桜や遺影しのばす旅鞄

逢ひに行く記憶の夏にふれたくて

夏ぐれの晴れといふらし寡婦の旅

日傘に日照雨ふたたびの守礼門

揚羽蝶首里城囲むデッキかな

木洩れ日のひめゆりの塔蟻の列

榕樹の下闇玉砕の御霊

白服の学徒や母の来し方も

学徒らのつかの間の笑み仏桑花

証言や日々傷兵の蛆をとる

一匹の蠅がまつはる洞窟の前

麦藁帽黒糖食めば涙味

敵味方二十万の名雲の峰

シーサーの八十余年炎ゆる黙

落し文不戦の国ぞこれからも

ジェット音ウミカジテラス夏落暉

冷房を逃れてほつと夜風かな

空港は香水の香の此岸なる

夏富士や夫の語りし雲平線